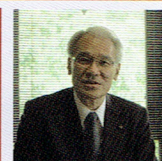


月刊

# 東海財界

## Monthly Report



愛知県歯科医師会会長 内堀典保

歯科と医科の連携を進め

口内の健康から日本の健康づくりへ

庭萬会長 前田壽己知

その土地のストーリーを感じ取り

日本の伝統美を守り抜く

愛知国際学院学院長 莊昌憲

留学生拡大政策は国益に寄与

日本語学校の貢献はより増大

中小企業整備機構中部本部長 三澤隆  
身元保証相談のパートナーとして活用してほしい

次々に起こる問題は  
憲法改悪に向けた序章なのか？

働き方改革は誰のため  
とある懇親会での一幕

文化の創造と国家社会の発展に寄与し  
人材を育成する名古屋市立菊里高校

愛知製鋼「秘密漏洩」事件の混迷  
無実訴える元役員、公判ストップの背景は

広報活動を充実し  
現場からのボトムアップを目指す

日本弁理士会東海支部  
井上健知支部長

名古屋大学・岐阜大学

「統合」から見えてきた理想と現実



# 愛知製鋼「秘密漏洩」事件の混迷

## 無実訴える元役員、 公判ストップの背景は

トヨタグループの愛知製鋼（愛知県東海市）で昨年、元役員と元社員が逮捕される事件があった。同社が扱う「センサー」の技術情報を外部に漏らした不正競争防止法違反、いわば「スパイ容疑」という重大な疑いだ。だが、元役員は逮捕、起訴後に保釈され、全面的に無実を主張。裁判は昨年六月の初公判以来、一年近くも公判が開かれずストップしている。一体、何が起きているのだろうか。

### ■「営業秘密でも何でもない」

「事件はまったくのでっちあげだ。有望な技術を持つ会社の乗り取りが企てられたようなものだ」  
強い憤りをあらわにするのは本蔵（ほんくら）義信氏。正確には「被告」の立場だが、昨年の保釈後から現場に復帰、自らが設立したベンチャー企業「マグネデザイン」の名古屋市内のオフィスでこれまで通りセンサーの研究開発に

取り組んでいる。それは「GSRセンサー」と呼ばれる技術だ。

一方、今回の事件で問題とされているのは「MIセンサー」。本蔵氏が愛知製鋼社員時代に開発を主導し、自動車用のみならずスマートフォンや食品の異物検出装置などに活用され、一時期は年間数十億円規模の事業に成長していた技術だ。

愛知製鋼側はこの「MIセンサー」の技術情報を含む営業秘密を、本

蔵氏と同僚だった菊池永喜氏が外部に持ち出し、不正に利益を得る目的で他社に開示したとして二人を告訴した。ただし当初、一昨年八月に告訴した六件については名古屋地検が不起訴とし、昨年二月に追加で告訴された一件についてのみ愛知県警が逮捕容疑としている。

その内容は本蔵氏と菊池氏が二〇一三年四月、愛知製鋼岐阜工場の会議室で「次世代MIセンサー」の製造工程などをホワイトボードに示し、大阪市の電子部品会社の社員に説明したというものだ。

しかし、この告訴内容について本蔵氏は「MIセンサーではなく、まったく新しい技術であるGSRセンサーを開発するために、まだ私

の頭の中にあつた製造のアイデアを説明しただけだ。大まかにはMIセンサーの工程とも重なるが、それは『ワイヤーを張る』『整列させる』『切る』といった一般的な動作のことで、営業秘密でも何でもない」と主張する。

つまり、愛知製鋼側がMIセンサーとGSRセンサーを混同した「勘違い」だという。弁護側も「検察側が何を訴えようとしているのか分からない」と指摘、名古屋地裁の初公判後、非公開の期日間整理手続きで争点を整理しているが、今年度に入り地裁や地検の担当者も変わって一層混迷が深まっているのだという。

# 高性能電子コンパス

高性能電子コンパス

年	2008	2011	2016
仕様	NOKIA向け	Google向け	次世代
原理	MIセンサ	MIセンサ	GSRセンサ
製品寸法 (mm)	4×4×1	2×2×1	1.2×1.2×0.6 開発中
ノイズ	2mG	1mG	0.5mG
方位精度	10度以下	5度以下	3度以下

## ■路線対立、 独自に研究開発の矢先

そもそも愛知製鋼のセンサーは、名古屋大学の毛利佳年雄名誉教授が発見した「磁気インピーダンス (MI) 効果」を基に、名大で磁性物理を学んだ本蔵氏が量産

品とするため、一九九九年に共同開発をスタートさせた。

商品化したセンサーは熱処理したアモルファスワイヤーを三〇マイクロメートルの間隔で基板上に並べ、メガヘルツ単位の電流を流して外部磁気の反応を高感度で検出できる。こうしたセンサーはスマートフォン

本蔵氏が愛知製鋼時代に開発した「MIセンサ」と独立して開発した「GSRセンサ」の比較

スマートフォンの電子コンパスに採用され、将来的には自動運転車への応用も期待されていた。

言うまでもなく鉄鋼製品が主力の愛知製鋼にとっては新規事業分野であつたが、本格的な電気自動車時代の到来を見据えたトヨタ自動車の幹部も本蔵氏の研究開発に注目していた。ところが、二〇〇六年にトヨタ自動車から愛知製鋼に副社長として迎えられ、〇八年に社長に就いた安川彰吉氏が、センサー事業の方向性をめぐって本蔵氏と路線対立。一二年の株主総会で本蔵氏は当時の技

術統括専務を退任させられ、技術部門へのアクセス権のない委任契約の技監にさせられた。事実上、センサー事業から外されたのである。

関係者によると、このころ同社のセンサーはアップルの「iPhone 6」への採用が内定していたが、経営陣はアップルが求めていた量産工場建設の採算性に問題があるとして事業化を見送った。さらにセンサーの生産、販売を半導体メーカーの「ローム」に委託し、自社はライセンス収入を得るビジネスモデルに切り替えた。こうした方針転換と冷遇から、本蔵氏は独自に次世代のセンサーを研究開発することを決意し、一二年九月にマグネデザイン社を設立。一四年六月には最後に務めた顧問を退任し、愛知製鋼を完全に離れた。事件はその間の、いわば「移行期間」での活動にかけられた疑いだ。

アップさせるため、製造工程を根本から見直す必要があつた。アモルファスワイヤーは熱処理をせず従来のお倍の張力で引っ張り、五マイクロメートルほどの間隔で精密に整列させ蒸着、切断するなど随所に工夫が施された。その量産化に向けて本格的に動き出したタイミングで、今回の事件化。告訴に伴い、「GSRセンサ」の特許や本蔵氏の全財産は差し押さえられた状態だという。だが、「こうしている間にも日本の技術が世界に追いつかなくなってしまう」と本蔵氏は外部の支援で研究を続け、国際会議での論文発表も予定している。

愛知製鋼側は逮捕時点で「全容の解明に向けた警察の捜査に全面的に協力していく。逮捕を厳粛に受け止め、社内管理体制の一層の強化と再発防止をはかっていく」という主旨のコメントを出したきりだ。異例の事件の先行きは、現時点で闇の中だ。  
(ジャーナリスト・関口威人)